

二〇一九年度 卒業論文

これからの伝道

— 寺内町をきっかけとして —

L 1 6 0 0 7 9

西川 弥芳

目次

序論	1
本論	2
第一章 現代における伝道の必要性	2
第一節 現代の人々の宗教の捉え方	2
第二節 宗教に触れる機会	5
第三節 宗教を考える機会	7
第二章 真宗と寺内町	10
第一節 発生と形成	10
第二節 戦国時代の寺内町	12
第三節 観光面から見た寺内町	15
第三章 寺内町をきっかけとする伝道	18
第一節 蓮如の伝道	18
第二節 真宗を知るきっかけとするために	21
結論	24
註	

参考文献

序論

私の大学四年間を表わす言葉は「きっかけ」であると思っている。これは大学生生活に限らず、私生活やアルバイト・課外活動なども含まれる。例を挙げると、龍谷大学真宗学科への進学を考えたきっかけは、身近な人の死である。誰かの死によって、普段の生活ではあまり感じていない宗教を身近に感じたことで「興味を持つ」ということ自体は珍しいことではないと考える。しかし興味を持った後、自らインターネットで検索してみたり、関連する書籍を手にとってみたりする人より、「興味を持った」で終わってしまう人の方が多いのではないだろうか。こうした疑問から、伝道において「きっかけ」の活かし方を考えたいと思った。

「きっかけ」として着目したのが観光からのアプローチである。近年は、SNSの発展などから、普段とは違う景色を求め、歴史を感じられる場所や自然に囲まれた場所に足を運ぶ人は多い。そうした中で、浄土真宗に関係し、歴史的な風景が残っていて、気軽に訪れやすいなど、伝道におけるきっかけとして、室町時代から江戸時代初期にかけて広い範囲で形成された宗教都市である寺内町を取り上げ、考えていく。

私は大学で学ぶ中で、宗教とは「死」に関することだけではなく「死」を含む「生」に寄り添っているものだと考えている。この考えを、先に述べた身近な人の死に直面した際に知っていたら、当時のような自分を含む家族の混乱に寄り添い、安穏な気持ちで送ることができたのではないかと思う。

少子高齢化をはじめとする日本の人口の問題を考えると、今後、「死」に触れる機会は多くなるだろう。それに伴い、浄土真宗に限らず宗教の存在は重要な役割を持つと考えられる。何かのきっかけで真宗を知り、学ぶこと

で、「死」をはじめとした「生」に対する心持が豊かなものになるのではないかと思ひ、これからの伝道について考察する。

本論

第一章 現代における伝道の必要性

第一節 現代の人々の宗教の捉え方

はじめに、近年の日本人は宗教についてどう捉えているかを考察する。一九五三年から五年ごとに「日本人の国民性調査」という社会調査を行っている統計数理研究所の、宗教に係する項目をみていく。まず「宗教を信じるか」という設問の結果は、調査を開始した一九五三年から最新の二〇一三年までの年も多少の増減は見られるものの、ほぼ「信じている」が三〇パーセント前後で、「信じていない」が七〇パーセント前後である。¹そして、この集計結果を年齢別でみると、二〇歳代から四〇歳代は、「信じている」が約八〇パーセントで、「信じていない」が約二〇パーセントであるのに対して、五〇歳代から六〇歳代は「信じている」が約七〇パーセント、「信じていない」が約三〇パーセントになる。さらにそれ以降の七〇歳以上の回答では「信じている」「信じていない」が約半分の割合になる。²とはいえ、文化庁の「宗教関連統計に関する資料集」にまとめられている通り、

年代による差は縮小傾向にある。³また、男女別でみると、「信じている」は女性の方が若干高い。⁴

続いて、「宗教心」は大切か」という設問項目である。この設問は一九八三年から二〇一三年までの統計であるが、「大切」が約八〇パーセントの一九八三年の結果を除いて一九八八年から二〇一三年は、「大切」という回答が約七〇パーセントという結果になる。⁵こちらの結果も年齢別で見ると、二〇歳代から三〇歳代は、年々多少の増減は見られるものの、「大切」の割合は五〇パーセント程度となり、四〇歳代では約六〇パーセントが「大切」と答えており、五〇歳代から七〇歳代以上では、約七〇パーセントが「大切」と答えている。特に六〇歳代と七〇歳代以上の結果は三〇年間ほぼ変わらない割合である。⁶ちなみに、男女別の結果は、男女共にほとんどその差はない。⁷

最後に「あの世」を信じるか」という設問項目である。この設問は一九五八年と二〇〇八年、二〇一三年の計三回集計されており、一九五八年と後半の二回では結果が大幅に変化している。一九五八年の「信じる」の回答は約二〇パーセント、「どちらともいえない」が約一〇パーセント、「信じない」は約六〇パーセントといった結果になっており、対して後半の二回では「信じる」が約四〇パーセント、「どちらともいえない」が約二〇パーセント、「信じていない」が約三〇パーセントとなり、「信じる」「信じていない」が五〇年間で半分ほど減少した結果となっている。⁸年齢別の結果では、一九五八年では年代が上がるにつれ、「信じる」の割合が増えているのに対し、後半の二回では、年代が上がるにつれて「信じる」の割合は減少している。⁹また、男女別の集計結果では、三回とも女性の方が「信じる」の割合が高い結果となっている。¹⁰

こうした集計結果をみて、林文氏は

、宗教的な心大切、という考えが、加齢とともに信仰を持つようになることを支えてきたといえる。しかし、年齢層別にみると信仰を持つ人は少しずつ減少し、また、日本の特徴とされてきた、「信仰はなくても宗教的な心を大切と思う」人も減少している。、宗教的な心大切、の減少は信仰の減少につながっていると考えられる。しかし一方、あの世界を信じる、という考えは、一九五三年と比べて、二〇〇八年には増加しており、また若い年齢層では高年齢層よりも信じる人が多い。最近の「環太平洋価値観調査」によれば、「霊魂」「死後の世界」についても、若い年齢層の方が、ある、あるいは、あるかもしれない、と回答している。「宗教」「信仰」「宗教的な心」という言葉への反応は減少の傾向であっても、「あの世界」「死後の世界」「霊魂」などへの関心はむしろ増加していることは、死の恐れ、自然の神秘への尊敬、人の力の及ばない何かに対する畏敬の念、などは現在の社会でも無くなっていないことを示している。(中略)加齢とともに信仰に向かう土台となっていた、宗教的な心は大切であるという考え方が、若い層で減少していることは、確かに今後も信仰を持つものは減少することを予想させる。しかし一方「あの世界」や霊の存在などを信じるものはむしろ増える傾向があり、それらは宗教と結びつくことも考えられるものの、今の社会における既存の宗教や、これまで宗教的な心とされてきたものとは多少違う形で捉えられているのであろう。¹¹

とまとめている。

国民性調査の他にもいくらかの宗教に関する調査の結果を閲覧したが、どの調査でも「宗教を信じる」の割合

に対し、「宗教心を大切だと思う」や「あの世を信じる」といった割合が高い結果となっていた。¹²

こうした結果から私は、近年の日本人は宗教に関心がないわけではなく、「宗教を信仰する」ことに対して不安があるのではないかと思った。これは、オウム真理教事件などにより、安易に「〇〇教を信仰しています」などと言うことに抵抗があるのではないかと思うからである。こうした考えの一因には、宗教に触れる機会や、知る機会が少ないことが挙げられる。よって第二節では、宗教に触れる機会について考察したいと思う。

第二節 宗教に触れる機会

お寺や神社に関係している人や、熱心に信仰している人々を除いて、日常生活の中で宗教または宗教的な行為に触れる機会というのはお葬式や法事、初詣や七五三などが挙げられる。しかし、実際に「その人」が宗教に触れていると感じるかどうかは、自分が今、宗教的なものに関わっているか否かを意識しているかによって変わってくるのではないかと思う。例えば、お葬式や法事などにおいて、遺族（主催者）は宗教に関わっている意識は強いと思われるが、参列者は、亡くなった方に最後に会いにきた、お別れを言いに来たなど、人生の中の一つの行事であって、宗教的な空気は感じていても、自分が宗教活動に参加しているといった意識は薄いのではないだろうか。初詣や七五三などは更に宗教活動をしている自覚はないだろう。こうした宗教的な行為について大谷光真氏は、

多くの日本人は広い意味での宗教心もあるし、実際に、宗教的な行為をしている人も多いと思います。しか

し、それはあまり自覚されない宗教心であって、それだけでは、今、世の中を覆っている深刻な課題には対処できないでしょう。人生を支えるようなしつかりした宗教でないと、現代社会に生きている宗教という感じはしません。

と述べている。¹³また、大谷氏は

日本人にとっては日常生活での宗教的な行為、たとえば正月に神社にお参りするとか、結婚式で教会や神社に行くとか、葬儀や法事をお寺で勤めるとか、そういうことは自分の宗教ではない、宗教 (religion) という言葉が当たらないようなこととして受け止められているために、話が混乱するとか、わかりにくくなっているということだ。¹⁴

とも述べている。さらに、高橋卓志氏は

日本人の場合は、宗教が習慣上のものになっていて、信仰というものではなくなっていますよね。私たちはよくビュツフェスタイルと言ってるんですけど、クリスマスやって、年末の除夜の鐘撞いて、それでお宮に参る。それが日本人の一般的なスタイルになっていますから。

と述べている。¹⁵さらに、石井研士氏は、「われわれは自分たちの人生やライフスタイル上、「必要があるから」寺や神社に行くという認識で宗教と関わっているのです。信仰とは別問題です。」¹⁶と述べている。これらの見解から私は、「自分が今、宗教的な行為の中に身を置いている」という認識「が宗教を意識するためのひとつの引き金になると考える。しかし日本人は、宗教を信仰することを恐れている傾向にあるため、まずはなんとなくのレ

ベルで興味を持ってもらうことが、ただ「宗教に触れる」のではなく、「宗教に触れて、見る」ことに繋がるのではないだろうか。例えば、今年、日本中が熱狂したラグビーワールドカップでは「にわかファン」が注目を集めた。そんな中、試合後に実況が「良い意味でにわかファンが増えたことは大きい」と言ったところ、SNS 上で大きな反響を呼んだ。宗教においても、「にわか」という入り口を歓迎することで、宗教に対する敷居を下げることでも可能ではないだろうか。

第三節 宗教を考える機会

第一節でまとめたように、宗教への関心度合いは年齢とともに増加する傾向にある。この傾向の理由は、研究不足のため憶測になるが、死が身近ではなくなったからではないかと考える。医療の発達した現代において、人は簡単に死ねない。平均寿命が長く、少子高齢化の進む日本では、なおさら若い世代が「死」を感じることは少ないだろう。したがって、「死ぬこと」を考える機会が少ない中で成長し、人生の中で何か重要な選択をする状況や、自分の衰えなどを感じた際に、宗教について考えはじめるのではないだろうか。

現代の人々にとって死が身近なものではなくなっていることについて、大谷氏は、

昔は赤ちゃんや小さい子供さんが栄養不良等でたくさん亡くなりました。医学も進んでいなかったのです、若いお父さん、お母さんが子供を失う悲しみを味わわれることも少なくありませんでした。また、病院があまりありませんから、自宅で看病し、亡くなる例も多かったのです。今日、それを病院に委託していますか

ら、なかなか死というものに触れる機会がありません。そのため、宗教というものを考えるきっかけが、若い皆様方には与えられていないということが言えるのではないのでしょうか。そして、かなりの年齢になって人生の先が見えてきたり、何か深刻な事態にぶつかったりして、ようやく宗教的な課題に目覚めるというのが今日の実情であります。¹⁷

と述べている。さらに池上彰氏は、

人間はなるべく死から遠ざかるように、長く生きられるように医学分野で研究したり、事故が起こらないように気をつけてきました。特に日本人は死を穢れととらえ、なるべく目の届かないところに遠ざけてきました。(中略)

人がどのように亡くなっていくのかという事実が、どんどん現実味を失っているように思えます。死を洗いざらい見せろというつもりはありませんが、隠しすぎるのも問題です。周りの人の死を経験することで、死に備えることができるという側面もあるのです。身近な人の死に際して、どのように心の準備をし、そして、気持ちに区切りをつけて立ち直っていくのか、経験する機会が著しく減っています。

死を遠ざけることにより、傷つくことは避けられますが、突然、身近に死が迫ってきたとき、対処できなくなってしまう可能性もあります。まるで無菌状態で育ったために免疫が弱くなってしまったようなものです。¹⁸

と述べられている。先に述べたように、死を身近に感じる機会が若者は少なく、高齢者に多い。少子高齢化が進

む国であるが故に、高齢者が高齢者を送る機会の方が圧倒的に多いため、宗教に触れる機会は若者には限られてしまうのである。

在ることはわかっているものが、いざ自分の身に降りかかったときに、準備の有無で大きく変わることは、近年多発した災害でも見受けられる。数々の地震被害や台風、異常気象による災害を受け、各家庭で防災意識が高まった。また、メディアでも取り上げられることで多くの人の目にとまり、より一層防災意識が高まる。防災意識を持つ人が増えれば増えるほど、防災力は高まっていく。つまり、日頃から意識することが、備える際に一番大切なことだと考える。したがって、宗教に関心のない人（主に若い世代）が「宗教」を意識して考える機会を増やす必要があるのではないだろうか。

宗教について考える機会として、教育現場や観光などが該当すると考える。教育現場については、憲法で政教分離の原則が定められているため、公立学校では特定の宗派の教育を行うことはできない。（憲法二〇条・八九条）しかし、特定の宗派に偏らなければ、宗教の知識として教えることは可能である。¹⁹また、教育基本法の第一五条では、「宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない。」²⁰と規定されている。しっかりと知識として正しく理解されたならば、宗教に抱く恐怖心も取り除くことができるだろう。しかし、実際のところ教育の中で宗教にあまり意識が向けられていないのが現状である。貝塚茂樹氏は、こうした現状について次のように述べている。

私たちの日常生活を宗教を抜きに考えることは不可能である。（中略）教育基本法にも明確な宗教教育の規定

が明記されているにも関わらず、教育が宗教に無関心である状況は、教育の目的を達成するという観点からも問題がある。また、社会生活における宗教の意味と役割が教えられないということは、子どもたちが社会や文化について学ぶ機会を奪ってしまうことに等しいからである。²¹

貝塚氏の述べるように、日常生活に当たり前に含まれる宗教が宗教であると認知されていないままであることは、無知に等しい状況であると言えるだろう。無知とは危険性も帯びるものであるから、知識として宗教がどういったもので、私たちの生活にどのような関係しているか知ることが必要であると思う。

第二章からは、宗教について考える機会として挙げた、観光の面から、寺内町をピックアップし、考察していきたい。

第二章 真宗と寺内町

第一節 発生と形成

観光に訪れるということは、少なからず目的地に興味を持って足を運んでいるだろう。今回、宗教に触れ、考えるきっかけとなる機会として寺内町を取り上げる。本節ではまず、寺内町の大まかな概要をまとめる。

寺内町とは、『広辞苑』によれば、「中世後期、真宗寺院などを中心にして、堀などで防御した町。じないまち。」と記されている。²²私自身が高校生の頃に使用していた日本史の教科書にも、室町時代の章において「都市の発

達と町衆」というカテゴリーで

一向宗では蓮如の活発な布教活動がおこなわれ、越前吉崎や摂津の石山などに一向宗門徒の寺内町が成立した。寺内町は周囲に堀や土塁をめぐらし、真宗道場を中心に、町割りをもった街区に門徒の商人・職人たちが活発な経済活動をおこなった。²³

と記されている。また、受験勉強で使用した日本史のテキストにも、先に例に挙げた教科書と同じような括りで、寺内町の概要がまとめられている。²⁴したがって、寺内町という言葉自体は知識として知っている人が多いだろう。しかし、教科書にのっている知識のひとつ、といった程度の理解に留まり、宗教的な感覚で認識している人は少ないと思われる。実際に、寺内町の持つ宗教的意味は一般に思われているよりも希薄であると金井年氏などが述べている。²⁵この理由について金井氏は、「町中に見られる他宗派の寺院、檀家、また石山合戦に際して信長方についての寺内町があるなど、様々な事実が証明している。したがって宗教自体が人を吸引する門前町とは根本的に差異がある。」²⁶と述べる。しかし、寺内町が宗教都市の一環であることは事実である。寺内町と一口に言っても、時代も広く、様々な成立背景や、寺内町そのものの在り方に違いがある。今回は『やおまち発見 八尾の寺内町シンポジウム』の仁木宏氏の報告を参考に、寺内町の成立などについてまとめる。

まず、「町」には「富」が集まることで、武力による略奪や、領主による重い税などによって町人は悩まされている状況があった。よって、そうした状況から脱するために、寺院のもつ軍事力や政治力、宗教力といった強い力で守ってもらうことで、安定した商売や富の集積を行った。そして、町を囲う城壁として惣構ができ、防御力

の高い町となる。浄土真宗との関わりとしては、一五世紀後半、蓮如の布教活動によって、本願寺派が近畿地方を中心に爆発的に教線を広げ、成長した。村の百姓たちは地域社会の経済的な核（町）を渴望していたが、強い力で守られないと維持できなかった。そうした中で、村の真宗道場が政治的結集の場となっていく。真宗と惣の活動・村共同体の自治と合致し、社会的運動としての広がりを持つようになる。このように本願寺の力と民衆の力が合体し、寺内町が成立していった。すると、寺内町へ周辺農村から人・交通が集まり、商売の場が生まれ、移住や婚姻関係など、経済的發展を見せた。宗教のみならず、経済・政治においても寺内町（中心寺院）が核となっていたのである。²⁷

金井氏によると、寺内町の性格として、概ね三点があげられる。一点目は、真宗の寺院を中心とすること。二点目は、中世後期に発達したこと。三点目は、近畿、北陸地方に分布したこと。²⁸である。しかし、この三点はこの通りではないとも言え、金井氏は「寺内町を狭義のものと広義のものに区別して考える」²⁹としている。本論では、金井氏が述べる狭義³⁰の、真宗との関わりが強い寺内町を中心として考察する。また、寺内町の雰囲気や宗教的な特色なども地域によって異なるが、今回は関西地方の寺内町をメインに考察したい。

第二節 戦国時代の寺内町

この論文は、伝道に繋がるきっかけを主に考えており、そのきっかけの場所として寺内町を例に挙げた。しかし、前提として寺内町に興味を持ってもらい、足を運んでもらうためには、人を惹きつける何かが必要になる。

寺内町についても、真宗についても、あまり詳しくない人が、気軽に足を運んでみたいと思ってもらうことを念頭に考えてみると、歴史的な面からアプローチすることが、広い年齢層から興味を引けるのではないだろうか。このように考えた理由は三つある。一つ目は、入り口として宗教色が強くないこと。二つ目は、歴史上、人気の高い時代であり、その時代を代表する人物も関わっていること。そして三つ目は、歴史を感じられる景観をもつことである。したがって、本節では戦国時代の寺内町をメインにまとめる。

戦国時代の真宗と聞くと、一向一揆や石山合戦をまず連想する。これらの流れについて、末木文美士氏の『日本宗教史』を参考に簡単にまとめる。

第八世の蓮如は、都に近い近江から教化をはじめめるも、その影響力から比叡山勢力との拮抗となった。そのため蓮如は、文明三年（一四七一年）に越前吉崎へ引退する。しかし、ここでも蓮如の影響力は強く、浄土真宗勢力の拡大が進んだ。すると、浄土真宗勢力の急速な発展を快く思わない宗教勢力や政治勢力と軋轢が生じ、本願寺門徒は、高田門徒と結んだ加賀守護富樫幸千代に対し、富樫政親と結び、勝利。しかし、新たな守護となった政親とも対立した。そのため蓮如は吉崎を離れ、山科本願寺の建造に着手した。後に本願寺門徒は、加賀一向一揆により政親を攻め滅ぼし、自治を開始した。以降一向一揆は諸国に広がり、織田信長によって石山本願寺が攻められ、顕如らが退去するまで、宗教による支配を実現した。³¹

また、戦国時代は、都市が大きく発展した時代である。戦国時代の都市と聞くと城下町が浮かびやすい。仁木氏は、寺内町と城下町について、

従来、寺内町は、浄土真宗（一向宗）・一向一揆に結集した民衆が、権力に対抗するために発展させたものと考えられてきた。一方、城下町は、戦国大名が領国を支配するための装置とみなされ、そのため、これら二つの都市は、性格を全く異にし、きびしい対抗関係にあったものとされてきた。³²

と述べている。今回、城下町については深く触れないが、歴史的に両者は、都市として各々独立して考えられてきたと理解できる。また、このことから、寺内町は歴史的な面に加え、都市社会学や地理学などの面でも興味深いものといえる。したがって、寺内町に興味を持ってもらうための要素は多岐に渡り、それに伴ってより幅広い人々に訪れてもらえる可能性があるといえる。

先に述べたように、戦国時代における浄土真宗の動きの中で、多くの人が連想するのは加賀一向一揆をはじめとする一向一揆や、織田信長と石山本願寺（大坂本願寺）との抗争だろう。であるならば、このあたりが最も宗教的なものへの警戒心が薄く、受け入れやすいと考える。今回は、石山合戦を中心に寺内町と真宗についてまとめらる。

石山合戦は、長浜市長浜城歴史博物館編の『顕如・教如と一向一揆―信長・秀吉・本願寺―』を参考にまとめる。と次のようになる。

永禄一一年（一五六八年）に、足利義昭を将軍として京都に新たな政権を樹立した織田信長に対し、顕如・教如らが石山（大坂）本願寺に籠城した。以降断続的ながら一一年間にわたって信長と戦い続け、天正八年（一五八〇年）に、石山（大坂）を退去するまでの戦いである。³³

このように、一般的には本願寺対信長という理解が大半だろう。実際、辻井清吾氏が

寺内町は軍事防衛機能を正に備えた都市であり、石山戦争に見られた宗教的連帯感に因る各地の門徒衆の結集に基づく「百姓ノ持チタル城」に拠って立つ戦闘参加は、強固な都市連合の形成と同義といえよう。かつ、その宗教的連帯感を主軸とする運命共同体が、自衛精神と共に確固たる宗教的絆により、乱世の戦国時代に平和な都市生活が豊かに反映していた事は特記され注目すべきであろう。³⁴

と述べるように、結集して信長に対抗していたことが予想できる。しかし、続けて辻井氏が「一向一揆の天王山としての石山戦争において、石山と行動を共にしない多くの寺内町があった」³⁵、さらに草野頭之氏が「石山合戦が勃発した時、本願寺とともに信長と戦った寺内町と、信長から寺内町特権を安堵されることを引き換えに、中立を守った寺内町もみられた」³⁶と述べているように、寺内町が必ず信長と敵対していたわけではないことがわかる。このことから、単純に戦国時代が好きな人に加え、その背景などに興味を持つ人など、ポピュラーな要素だけでなく、マイナーな要素から興味を引くこともできるのではないかと考える。

第三節 観光面からみた寺内町

最後に観光面からの寺内町を考察し、訪れやすさなど、伝道に活かせるポイントを整理する。寺内町は各地に存在しているが、今回は近畿にある寺内町を中心に見ていく。その理由は、前節で歴史的な面からのアプローチが有効ではないかと論じたことにある。寺内町の歴史的に大きな出来事は主に近畿で起こっている。そのため、

聖地（ここでは宗教的な意味に加え、憧れの場所といった意味も含む）を訪れるという行動をとりやすい。つまり、比較的寺内町に訪れやすい地域は、近畿の寺内町といえるだろう。また、更に範囲を広げると、関連した歴史的な場所や、有名な観光地が近くにあり、遠方の人も、「ついで」感覚でも足を運ぶ可能性があると考えられる。以上から、近畿の寺内町、特に富田林寺内町を取り上げる。

富田林寺内町は、大阪府富田林市にある。近鉄富田林駅から徒歩一〇分であり、アクセス面も良好である。そしてこの寺内町は、堀新氏によると、「富田林は「大坂並」と表現された唯一の寺内町であり、寺内町の典型と評価されている。」³⁷と記されおり、より観光地として訪れやすい環境にあると言えるだろう。続いて、富田林市観光協会の、富田林寺内町の案内文は、

永禄初年頃（一五五八〜一五六〇年頃）、興正寺門跡証秀上人によって創設された興正寺別院を中心とした寺内町として誕生し、商売の盛んな在郷街として発展しました。

現在も創建当時の六筋七町（後に八町）の町割りや、重要文化財旧杉山家、大阪府指定文化財仲村家住宅など住時の繁栄を偲ぶ重厚な町屋が数多く残されています。また、大阪府内で唯一の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。³⁸

と記されている。さらに、富田林市観光協会関連ページの「富田林寺内町の探訪」では、

寺内町は一五六〇年（永禄三年）に開発された一向宗（浄土真宗）の宗教自治都市です。今でも戦国時代の町割（都市計画）を留め、江戸時代以降の町屋（まちや）約四〇軒が時代劇セットさながらに昔の姿そのま

まで残されています。(中略) 世俗化された観光スポットとは異なり、別世界のようなゆったりとした時が流れ、癒しと語らいの空間になっています。³⁹

と記されている。また、富田林市都市魅力創生課が発行しているパンフレットでは、「仲良し大学生がめぐるインスタ映えSPOT」という見出しで特集が組まれているなど、様々な富田林寺内町の魅力が記載されている。⁴⁰これらの案内文を読んで「行ってみたい」と思う人は多いだろう。先にも述べたが、観光するにあたって、その場所の景観と非日常感は重要な要素であると思う。その点において富田林寺内町は十分にクリアしているといえる。

富田林寺内町には四つの寺院があり、その位置が密集しているわけではないため、寺内町を一周する間に何度か視覚的に「宗教」を意識できる。中心となる興正寺別院の一部は重要文化財に指定されており、観光で富田林寺内町を訪れた際には、ほぼ確実に足を運ぶ場所だと推測できる。また、興正寺別院は大阪府内の浄土真宗の寺院本堂としては最古の建造物になるという。⁴¹ 宗教的にも歴史的にも十分な魅力を持つことがわかる。

そして、この寺内町は地域交流の場としても大きな役割を果たしており(例・じないまち交流館)、富田林寺内町が過ごしやすい空間であることがうかがえる。さらに、この寺内町では、ほぼ毎月イベントが行われているため、⁴² いくつか足を運んでも満足度の高い時間を過ごせるだろう。

戦国時代の織田信長と本願寺派の抗争については、富田林寺内町は信長方に恭順した。和平を選んだのである。しかしこの選択が富田林寺内町の現存に大きく貢献していることは、信長に破れ、石山本願寺が焼失したことから推測できる。とはいえ、本願寺門徒が寺内町形成に関係していることは明白である。⁴³ したがって、前節で述

べた歴史的な面からのアプローチは可能であると考える。

以上より、一つの寺内町にしか触れることができなかつたが、寺内町が観光地としても伝道に繋がるきっかけの場としても、十分なポテンシャルを持つといえる。

第三章 寺内町をきっかけとする伝道

第一節 蓮如の伝道

本章では寺内町の形成にも大きく関わった蓮如の伝道について考察し、寺内町をきっかけとした伝道の具体的な方法のヒントにしたい。

蓮如の伝道（布教）方法で最も連想されるものは『御文章』（御文）である。『御文章』は「真宗教義の要を平易な消息の形式で著されたものである。（中略）どんな人にも領解されるように心が配られ、文章を飾ることもなく、俗語や俗諺までも駆使されている。」⁴⁴と説明される。また、石田学氏が『御文』は信徒の集まる講で声に出して読まれ、門徒たちは書き写し、やがて開板（木版本の出版）されるようになり、個人の家で朝夕、仏前で読まれた。⁴⁵と述べている。さらに、前田恵學氏は

上人は一代の間に衰微していた本願寺を再興（中略）上人の力強い教化があつてはじめて真宗は宗派として日本仏教の雄たる位置を占めるをえたのである。その教化は御文によるところが多く、御文による文書伝

道の影響は、その後今日にまで及んでいる。日本仏教の聖典の中で、これほど多くの人々に味読されたものは他にないであろう。⁴⁶

と述べている。以上から、真宗の伝道において、『御文章』が重要な位置を占めていたことがわかる。これらの評価から、真宗の伝道において特に教線を拡大した蓮如と関わりの深い寺内町は、真宗を知る入り口として十分なポテンシャルを持つものであると考える。

『御文章』の最大の特徴は親鸞聖人の教えを、多くの人々にわかりやすく要約して記したことにあるだろう。

天岸淨圓氏は「三首の詠歌章」にそのところが明らかに示されていると述べる。⁴⁷その詠歌とは、

ひとたびもほとけをたのむころこそ まことののりにかなふみちなれ

つみふかく如来をたのむ身になれば のりのちからに西へこそゆけ

法をきくみちにころのさだまれば 南無阿弥陀仏となへこそすれ と。⁴⁸

の三首である。蓮如はこの歌のころを、「はじめは、一念帰命の信心決定のすがた（中略）のちの歌は、入正定聚の益、必至滅度のころ（中略）つぎのころは、慶喜金剛の信心のうへには、知恩報徳のころ」⁴⁹と示されている。天岸氏の意識によると、

はじめの一首は、ひと筋に仰せに順う、信心決定のありさまを詠んだもの（中略）二首目は、入正定聚の益（現生の利益）、必至滅度の益（当来の利益）といわれる、現当二益のころを詠んだもの（中略）三首目は、金剛の信心をたまわったことを慶び、仏さまのご恩を報謝する、お念仏のころを詠みあらわしました。⁵⁰

とされる。天岸氏は、一首目が、「信心正因」、二首目が「現当の利益」、三首目が「知恩報徳」「称名報恩」のいわれであり、これら三つを合わせて「平生業成」の法義として『御文章』にあらわされたと述べている。⁵¹蓮如が吉崎に入ってから、参詣者は増えているものの、訪れる人々に信心決定の姿勢が見受けられないことを嘆かれていることは、『御文章』の「雪中章」⁵²や「吉崎建立章」⁵³などに示されている。そのような人々が「三首の詠歌章」などで、わかりやすく信心決定のありかたなどを知ること、阿弥陀仏の尊さに気づかされること、きたのではないだろうか。「三首の詠歌章」で蓮如は「ただ本願のひとすぢのたふとさばかりのあまり、卑劣のこの葉を筆にまかせて書きしるしをはりぬ」⁵⁴と記しており、これは「ただ、本願の尊さを、少しでも明らかにできればと願うばかりの想いから、つたない言葉ながらも詠んだものです」⁵⁵と意識されている。これらのことから、蓮如が真宗の教えを多くの人々に伝えたい思いが感じられる。

また、伝道として『御文章』がいかに優れたものであるかわかるエピソードを石田氏が述べている。要約すると、蓮如が第九代本願寺法王の職を継ぐように実如に申し付けたが、これを実如は、自分は適任でない、と再三にわたって辞退した。これに蓮如は今までの御文をまとめて判を押し、「天下の尼入道（女性の仏教信者）などのような無学のものに教えてやるがよい、御文以上の教えはこのほかにはないのだ」といって実如に与えた。実如の代では、京・田舎共に御文がますます重要だといわれるようになった。⁵⁶といったものである。さらに『御文章』の重要さがわかるものに『蓮如上人御一代記聞書』の中にある、御文を書いていたいただきたいという記録や、御文の大切さを確認する記録などがある。⁵⁷

以上、研究の少ない中ではあるが、伝道の中で『御文章』が大きな役割を果たしていたことがわかる。また、その結果に大きく影響したのが、わかりやすい文章であったことである。これらのことから、現在の伝道においても共通することは、万人にわかりやすい伝え方をするのだと考える。この結果を踏まえて、次節から寺内町をきっかけとした伝道の具体的な方法を考える。

第二節 真宗を知るきっかけとするために

第二章では、寺内町をきっかけとするために、寺内町に足を運んでもらうことに重点を置いて考察した。具体的には、歴史や都市社会学、地理学などの知識・興味からの面、SNS 映えなど、現代社会の娯楽のニーズを含めた面などから、興味を引くことができるのではないかと結論付けた。これを踏まえて本節では、きっかけを活かし、真宗に興味をもってもらうことを重点に考えていく。

この節の到達点は、訪れた人に真宗への興味を持ってもらうことであると述べた。これを更に明確に示すと、訪れた人がその場で、つい意味や内容を調べてしまう、誰かに（と）共有してしまう、といった行動に繋がるような方法を考えたい、ということ念頭に置いていただきたい。ただし、寺内町側と連携して何かを行う、といった方法ではなく、主に寺内町のポテンシャルを利用して、伝道に繋がる案を考えることを前提とする。

まず、真宗に限らず、宗教にアレルギー意識をもつ日本人が宗教を求めているのか考察する。第一章では、日本人が宗教に未知の恐怖があることをまとめた。しかしこれは、怖がってはいるものの宗教をなくすべきである

とは言っていない。日常生活に当たり前に存在している宗教は、意識が「宗教的なもの」と認識していないために受け入れられている。これは日本人が生もの（刺身など）を食べることに驚く外国人に驚く、といった関係性に似ているように思う。そして第三者に指摘され、「言われてみれば」と行動を一度は客観視しても、結局指摘されたことをやめることはない。「慣れ」とは感覚の麻痺に近いかもしれない。したがって、宗教にアレルギー意識を持つ日本人は、言われてみればいつも自分のそばにある、または必要としている、程度の宗教の認識をもって、ということがいえるのではないだろうか。実際、「宗教ブーム」や「パワースポットめぐり」というものは定期的に訪れる。そしてそのブームの中心は大抵若者である。島田裕巳氏は若い世代がパワースポットに足を運ぶ理由を「意外と若い世代の中に、宗教的なものに対する関心が、一時よりも強くなっている気がします。」⁵⁸と述べ、そうしたブームの起因は

生活に切羽詰った人たちが「すがりたい」といって集まったような一昔前の新興宗教ブームとは違う（中略）日常生活が平穏でありますように、くらいの軽い感覚です。ちょうどそのレベルの信仰が、いま一番人気を集めている⁵⁹

と述べている。さらに池上彰氏は、「具体的に決まった宗教を信仰していることを明言する人は少なくとも、多くの方が、「信仰心」を持っています。それが、若い人の間での「パワースポット巡り」になって現れているのかも知れません。」⁶⁰と述べており、日本人の多くが自覚のない信仰心を持っているといえるだろう。また、切羽詰った状況や、大変な状況にいるとき、「未知の何か」や「神秘的な何か」などを拠り所に、自分の心を整理する場面

も、自覚のない信仰心（宗教心）に近いものだと考える。

そもそも神社仏閣などに訪れたいと思う理由には、癒されたいなどの心情があるだろう。寺内町の景観などのポテンシャルは第二章で述べた通りである。そうした心情にあるとき、人は言葉に敏感になる。視覚・聴覚の両方が、今の自分の在り方がどうなっているのか、あてはまる言葉を捜しているように思う。大谷氏は「仏教は基本において、私の在り方を省みるところから始まります。」^{6.1}と述べている。したがって、言葉をきっかけに真宗に興味を持ってもらえるのではないだろうか。

最後に、具体的な案を考えたい。まず、第二章で例に挙げた富田林寺内町の施設の一部は、無料で使用することができると言える。^{6.2} こういった地域の人々など、定期的に複数人が集まる場所では、口演による布教活動ができる。つまり、伝統的な伝道が可能だといえる。しかし、こちらの伝道方法は比較的身内向け（地域住民）になる。では本論のメインターゲットである、観光に訪れた人々向けの伝道を考える。一例としては、親鸞聖人の言葉や、『御文章』『歎異抄』などの一部を各地に提示することを挙げる。とはいえ、ただ全文そのまま提示するのではない。一部を穴あきにして選択肢を載せてクイズ形式のようしたり、QRコードやハッシュタグ、VRなどを利用してみたり、受け取る側が何かアクションを起こす工夫をしてみるのである。ただ、アクションを起こさせるだけでは提示した言葉の意味をわかっただけでは難しいため、更に工夫が必要であり、今後の課題となるが、「これは何だろう」と興味を引くことはできる。また、ハッシュタグやQRコードなどの利用を考えられた理由としては、スマートフォンなどの端末を使うことで、その履歴が残るからである。口演などの伝道方法は、その場で完結す

る場合が多い。記憶には残るが記録には残りづらいといえる。その点において、自発的にアクションを起こす先述の方法は、能動的でもあり受動的でもあるので、本人の記憶に残りやすく、端末を利用することでアクセスした履歴が残るため、当時の記憶を呼び出す引き金になる。これは時間が経ってから興味を誘発できるだろう。

また、端末を利用する利点としては、共有のしやすさ、疑問点を調べやすいといった点が挙げられる。これは、伝道において大切な「わかりやすさ」という点で有効に働く。当時の人々にわかりやすく教えを記し、教線を広げた『御文章』のように、これからの伝道は、現代の人々にわかりやすい言葉で伝えることが重要といえる。このような方法での問題点は、観光客の端末を利用するので、プライバシーの問題や、間違った解釈が拡散されるなどの恐れがあるが、今回は利点のみを見て論ずることをご了承いただきたい。

他には、先述のきっかけなどから真宗に興味を示し、何か文献を読んでみたいと思った方など向けに、あなた（対象者）にオススメの聖典診断やフロッチャートなど、アトラクション要素のあるコンテンツを行えば、話題性もあり、対象者はもちろん、より多くの人々が興味を持つてくれるのではないだろうか。

結論

これまで三章に渡って、寺内町を中心に「きっかけ」をメインテーマとして、これからの伝道を考えてきた。

「きっかけ」をメインとしたのは、伝道において一番重要なことだと考えたためである。何事も第一歩がないと次に進むことができない。これは序論でも述べたが、大学生活の中で身にしみて感じたことだ。しかし、大抵の場合、その第一歩を踏み出すためのチャンスに気づかない。食わず嫌いともいえるかもしれない。これらの状況は、宗教にアレルギーをもつ日本人にはよく当てはまる。本来、怖がられるものではない宗教が怖がられてしまふのは、「知らない」からであり、更に突き詰めると「知る機会がなかった」といえる。そうした状況から少しでも改善させるためには、知る機会をつくること、すなわちきっかけをつくることだと考えた。今回は寺内町という宗教都市に焦点を置き、そのポテンシャルを利用したきっかけづくりを考えてきた。考察や研究が未熟な点が多くあったが、「きっかけ」としての可能性は伝えられたのではないかと思っている。最近ではSNSの普及に伴い、何気ないことがきっかけで多くの人に注目される現象が日常的に起こる。伝道においてこうした現象は望ましいとは言えないかもしれないが、ひとつの方法として検討する余地はある。伝統的な方法を否定するのではなく、時代にあった方法を取り入れる姿勢が、これからの伝道において必要なことだと考える。

現在の日本において、宗教は疎遠されがちではあるが、不要なものではなく、今後も不要とされる日はこないだろう。しかし、知る機会がなく、世間のイメージを知識としてしまう状況は、我々にとってもその人にとっても好ましい環境とはいえない。本論でも述べたが、宗教を切り離して生きることができない。だからこそ、「知る機会」をつくる「きっかけ」は大切に重要なことといえる。寺内町に限らず、そうしたきっかけになりうるものは多くあると思う。今後も「きっかけ」を中心に現代社会における伝道を考えたい。

註

- 1 統計数理研究所「国民性調査」、「宗教を信じるか」一九五三年・二〇一三年
https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_all.g.htm 二〇一九年一月四日一五時。
- 2 統計数理研究所「国民性調査」、「宗教を信じるか」、年齢別 一九五三年・二〇一三年
https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_20.g.htm 二〇一九年一月四日一五時。
- 3 文化庁文化部宗務課「宗教関連統計に関する資料集」五五頁
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/shumu_kanrentokei/pdf/h26_chosa.pdf 二〇一九年一月四日一五時。
- 4 統計数理研究所「国民性調査」、「宗教を信じるか」、男女別 一九五三年・二〇一三年
https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_male.g.htm 二〇一九年一月四日一五時。
- 5 統計数理研究所「国民性調査」、「宗教心」は大切か 一九八三年・二〇一三年
https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_2b/3_2b_all.g.htm 二〇一九年一月四日一五時。
- 6 統計数理研究所「国民性調査」、「宗教心」は大切か、年齢別 一九八三年・二〇一三年
https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_2b/3_2b_20.g.htm 二〇一九年一月四日一六時。
- 7 統計数理研究所「国民性調査」、「宗教心」は大切か、男女別 一九八三年・二〇一三年
https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_2b/3_2b_male.g.htm 二〇一九年一月四日一六時。

⁸ 統計数理研究所 「国民性調査」、「あの世」を信じるか」一九五八年、二〇〇八年、二〇一三年

https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_5/3_5_a11_g.htm 二〇一九年一月四日一六時。

⁹ 統計数理研究所 「国民性調査」、「あの世」を信じるか」、「年齢別 一九五八年、二〇〇八年、二〇一三年

https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_5/3_5_20_g.htm 二〇一九年一月四日一六時。

¹⁰ 統計数理研究所 「国民性調査」、「あの世」を信じるか」、「男女別 一九五八年、二〇〇八年、二〇一三年

https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_5/3_5_male_g.htm 二〇一九年一月四日一六時。

¹¹ 林文 「現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心―日本人の国民性調査と国際比較調査から―」五五頁。
<https://www.ism.ac.jp/editsec/toukei/pdf/58-1-039.pdf> 二〇一九年一月四日一七時 年号については漢数字に改めた。

¹² 統計数理研究所 「国民性調査」、#3 宗教 一九五三年・二〇一三年

https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_a11_g.htm 二〇一九年一月四日一七時。

¹³ 大谷光真 『世の中安穩なれ、現代社会と仏教』一八四・一八五頁。

¹⁴ 大谷光真 『願いの力』四一頁。

¹⁵ 池上彰 『池上彰の宗教がわかれば世界が見える』一三七・一三八頁。

¹⁶ 鶴飼秀徳 『寺院消滅 失われる「地方」と「宗教」下、一五八頁。

¹⁷ 大谷光真 『世の中安穩なれ、現代社会と仏教』一五頁。

¹⁸ 池上彰 『池上彰と考える、仏教って何ですか?』二〇七・二〇八頁。

¹⁹ 土倉莞爾・廣川喜裕・大村和正・大藪俊志・森田吉彦 『現代政治の理論と動向』九九頁。

²⁰ 文部科学省 教育基本法 http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/06042712/003.htm 一月二十九日一時。

²¹ 貝塚茂樹 「戦後教育において「宗教」はどのように論じられてきたか―宗教教育の歴史と今後の課題―」、
『研究報告NO.78』五頁。

²² 新村出編 『広辞苑第六版』一二六三頁。

²³ 脇田修・大山喬平ほか一四名 『日本史B』一三五頁。

²⁴ 石川晶康 『石川晶康 日本史B 講義の実況中継②』二〇三頁。

²₅ 金井年 『寺内町の歴史地理学的研究』 八六頁。

²₆ 金井年 『寺内町の歴史地理学的研究』 八六頁。

²₇ 仁木宏 『寺内町の成立―戦国社会の到達点―』、『やおまち発見 八尾の寺内町シンポジウム』 三・五頁。

²₈ 金井年 『寺内町の歴史地理学的研究』 六四頁。

²₉ 金井年 『寺内町の歴史地理学的研究』 六四頁。

³₀ 金井年 『寺内町の歴史地理学的研究』 六四頁。

³₁ 末木文美士 『日本宗教史』 一一八・一一九頁。

³₂ 有光友學編 『日本の時代史 1 2 戦国の地域国家』 二五四頁。

³₃ 長浜市長浜城歴史博物館編 『顕如・教如と一向一揆―信長・秀吉・本願寺―』 七頁。

³₄ 辻井清吾 「信仰から見た「寺内町」構築とその経済的意義」、『佛教経済研究 4 6』 九一頁。

³₅ 辻井清吾 「信仰から見た「寺内町」構築とその経済的意義」、『佛教経済研究 4 6』 九二頁。

³₆ 大澤研一・仁木宏編 『寺内町の研究 第二卷 寺内町の系譜』 四六〇頁。

³₇ 大澤研一・仁木宏編 『寺内町の研究 第三卷 地域の中の寺内町』 四二頁。

³₈ 富田林市観光協会、富田林寺内町 <http://tondabayashi-navi.com/miru/jinaimachi.html>、二〇一九年、一一

月一八日一四時。数字については漢数字に改めた。

³₉ 富田林寺内町の探訪、富田林・寺内町（じないまち）へようこそ

<http://www5d.biglobe.ne.jp/~heritage/index.html>、二〇一九年一一月一八日一四時。数字については漢数字に改めた。

⁴₀ 「Only Oneの魅力を探す 近鉄長野線の旅 れきし おいし とんだばやし」、「仲良し大学生がめぐるインスタ映えSPOT」 <http://www5d.biglobe.ne.jp/~heritage/2018051Irekishi-oiishi-tondabayashi-japanese.pdf>、二〇一九年、一一月二〇日、一三時。

⁴₁ 富田林寺内町の探訪、重要文化財・興正寺別院（富田林御坊）

<http://www5d.biglobe.ne.jp/~heritage/koushouji.html>、二〇一九年一一月二〇日、一三時。

⁴₂ 富田林寺内町の探訪、イベントカレンダー・イベント情報、

- <http://www5d.biglobe.ne.jp/~heritage/event-information.html> 110119年11月10日13時。
- ⁴ 富田林寺内町の探訪、成立と歴史（宗教自治都市）
- <http://www5d.biglobe.ne.jp/~heritage/history.html> 110119年11月10日14時。
- ⁴ 『浄土真宗聖典注釈版』一〇八二頁。
- ⁴ 石田学 『『月明』蓮如評伝』五三三頁。
- ⁴ 大谷暢順 『蓮如「御文」読本』二五六頁。
- ⁴ 天岸淨圓 『御文章ひらがな版を読む』三三九頁。
- ⁴ 『浄土真宗聖典注釈版』一一六八頁。
- ⁴ 『浄土真宗聖典注釈版』一一六八頁。
- ⁵ 天岸淨圓 『御文章ひらがな版を読む』三三五頁。
- ⁵ 天岸淨圓 『御文章ひらがな版を読む』三三九頁。
- ⁵ 『浄土真宗聖典注釈版』一〇九〇頁。
- ⁵ 『浄土真宗聖典注釈版』一〇九五頁。
- ⁵ 『浄土真宗聖典注釈版』一一六八頁。
- ⁵ 天岸淨圓 『御文章ひらがな版を読む』三三六頁。
- ⁵ 石田学 『『月明』蓮如評伝』五一頁。
- ⁵ 『浄土真宗聖典注釈版』一三〇六頁。
- ⁵ 池上彰 『池上彰の宗教がわかれば世界が見える』七八、七九頁。
- ⁵ 池上彰 『池上彰の宗教がわかれば世界が見える』七九頁。
- ⁶ 池上彰 『池上彰の宗教がわかれば世界が見える』九四頁。
- ⁶ 大谷光真 『願いの力』一六七頁。
- ⁶ 富田林市立じないまち交流館、施設利用、<http://park10.wakwak.com/~kouryukan/k.riyou.html> 110119年11月11日19時。

参考文献
書籍

天岸淨圓 『御文章ひらがな版を読む』本願寺出版社、二〇一二年（デジタル版二〇一六年）

- 有光友學編『日本の時代史12 戦国の地域国家』吉川弘文館、二〇〇三年
- 池上彰『池上彰の宗教がわかれば世界が見える』文藝春秋、二〇一一年
- 池上彰『池上彰と考える、仏教って何ですか？』飛鳥新社、二〇一二年
- 石川晶康『石川晶康 日本史B講義の実況中継②』語学春秋社、二〇一五年
- 石田学『『月明』蓮如評伝』永田文昌堂、一九九七年
- 鵜飼秀徳『寺院消滅 失われる「地方」と「宗教」』日経BP社、二〇一五年
- 大谷光真『願いの力』本願寺出版社、二〇一一年
- 大谷光真『世のなか安穩なれ、現代社会と仏教』中央公論新社、二〇〇七年
- 大谷暢順『蓮如「御文」読本』講談社、二〇〇一年
- 岡村喜史『大阪と本願寺④蓮如宗主と大坂坊』浄土真宗本願寺派大阪教区教務所、二〇一五年
- 金井年『寺内町の歴史地理学的研究』和泉書院、二〇〇四年
- 後藤文利『真宗と日本資本主義―寺内町の研究―』同信社、一九八一年
- 桜井徳太郎編『仏教民俗学大系3 聖地と他界観』名著出版、一九八七年
- 积撒宗監修『親鸞100の言葉』宝島社、二〇一七年
- 积撒宗『NHK100分de名著2016年4月』NHK出版、二〇一六年

浄土真宗本願寺派総合研究所編『浄土真宗聖典―注釈版第二版―』本願寺出版社、一九八八年

新村出編『広辞苑第六版』岩波書店、二〇〇八年

末木文美士『日本宗教史』岩波書店、二〇〇六年

千葉乗隆編『千葉乗隆博士傘寿記念論集 日本歴史と真宗』自照社出版、二〇〇一年

長浜市長浜城歴史博物館企画・編集『顕如・教如と一向一揆―信長・秀吉・本願寺―』長浜市長浜城歴史博物館、二〇一三年

峰岸純夫・脇田修監修、大澤研一・仁木宏編『寺内町の研究 第二卷 寺内町の系譜』法藏館、一九九八年

峰岸純夫・脇田修監修、大澤研一・仁木宏編『寺内町の研究 第三卷 地域の中の寺内町』法藏館、一九九八年

安井澄心『近江・湖南の風土記―親鸞・蓮如の伝承―』サンライズ印刷株式会社出版部、二〇〇三年

脇田修・大山喬平ほか一四名『日本史B』実教出版株式会社、二〇一五年

渡部昇一『決定版 日本人論―日本人だけがもつ「強み」とは何か?』扶桑社、二〇一六年

論文

貝塚茂樹「戦後教育において「宗教」はどのように論じられてきたか―宗教教育の歴史と今後の課題―」、『研

究報告 No. 78』二〇一二年

貴島信行「真宗伝道学の基礎的考察―仏道としての伝道―」『真宗学』一三七・一三八合併號、二〇一八年
玉木興慈「釈尊と親鸞の伝道―浄土三部經の序文に見る釈尊の伝道教化―」『真宗学』一三七・一三八合併號、
二〇一八年

辻井清吾「信仰から見た「寺内町」構築とその経済的意義」、『佛教経済研究46』二〇一七年

林文「現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心・日本人の国民性調査と国際比較調査から」、『統計数理』五八、二〇一〇年

インターネット関連

公益財団法人中央教育研究所、刊行物のご紹介

<http://www.chu-ken.jp/kanko.html>

統計数理、第58巻、第1号

<https://www.ism.ac.jp/editsec/toukei/tokeisuri-58j.html>

統計数理研究所「国民性調査」<https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/index.html>

富田林市観光協会、<http://tondabayashi-navi.com/miru/jinaimachi.html>

富田林寺内町の探訪、<http://www5d.biglobe.ne.jp/~heritage/index.html>

富田林市立じないまち交流館、<http://park10.wakwak.com/~kouryukan/k.riyou.html>

NHK文化放送研究所 世論調査部小林利行「日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか」ISSP国際比較調査「宗教」・日本の結果から」

https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190401_7.pdf

文部科学省 教育基本法 http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/06042712/003.htm

文化庁文化庁宗務課「宗教関連統計に関する資料集」二〇一五年

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/shumu_kanrentokei/pdf/h26_chosa.pdf

その他

八尾市立歴史民俗資料館指定管理者・財団法人八尾市文化財調査研究会編『やおまち発見 八尾の寺内町シンポジウム』八尾市立歴史民俗資料館指定管理者・財団法人八尾市文化財調査研究会、二〇〇九年

龍谷大学大学院実践真宗学研究科公開シンポジウム 伝道を考える〜これまで・そしてこれから、二〇一九年一月二一日一三時一五分〜一七時、龍谷大学

龍谷大学大学院実践真宗学研究科公開シンポジウム 伝道を考える〜これまで・そしてこれから、二〇一九年一月二一日一三時一五分〜一七時、龍谷大学、配布資料